



# 共同性-作動性尺度の構成概念妥当性の検討 : A test of construct validity of Communion-Agency Scale (CAS)

著者	土肥 伊都子, 廣川 空美, 水澤 慶緒里
著者別名	DOHI Itsuko, HIROKAWA Kumi, MIZUSAWA Kaori
雑誌名	研究紀要. 人文科学・自然科学篇
巻	49
ページ	1-16
発行年	2008-03-10
URL	<a href="http://doi.org/10.14946/00001548">http://doi.org/10.14946/00001548</a>



# 共同性－作動性尺度の構成概念妥当性の検討<sup>1), 2)</sup>

— A test of construct validity of Communion – Agency Scale(CAS)—

土肥伊都子・廣川空美<sup>3)</sup>・水澤慶緒里

## <問題>

個人は、性染色体や性ホルモンなどの生物学的要因で決定される性，すなわちセックス (sex) により区別され，身体的特徴の多くがこれによって作られる。それに対して，女性性 (femininity) や男性性 (masculinity) など，性に基づいて期待された役割としての社会的性，すなわち，ジェンダー (gender) にそって自己概念を形成している程度にも個人差があり，心理的側面や行動的側面は，ここからの影響が大きい。ジェンダーという概念を初めて用いた性医学者の Money ら (1957, 1975) は，一個人の中において，身体的側面と心理的側面の性が必ずしも一致しないことを明らかにしたが，この不一致は，個人の性が，生物学的，社会的の両要因により規定されていることを示したものといえよう。そして様々な学問領域と同様，心理学においても，1980年代以降，盛んにジェンダーが研究されてきた。

ジェンダーを認知的にアプローチする心理学研究に，ジェンダー・ステレオタイプがある。これは，女性と男性の性格特性，能力，社会的役割，身体的特性，性的行動などについて人々が共有してもつ，構造化された社会的信念，思い込みのことである (Lippa, 1990)。そして，各個人がジェンダー・ステレオタイプをもつことでジェンダーに基づく社会が作られ，反対にそうしたジェンダーに基づく社会で生きることにより，個人のジェンダー・ステレオタイプが維

---

1) 本研究は，平成19年度松蔭特別研究助成を受けた。

2) 本研究の調査にあたり，関西学院大学文学研究科，中澤清先生と米山直樹先生にご協力頂いた。記して感謝致します。

3) 福山大学人間文化学部

持・強化されるのである。さらに性格特性についてのジェンダー・ステレオタイプについては、女性性は共同性（communion）、男性性は作動性（agency）がその中核になっていると考えられている。共同性とは、他者との協調や親密さなどに関する特性で、作動性とは、一人の人間として目指すべき自己成長や達成などに関する特性である（Bakan,1966；土肥，2006）。

わが国で最初にジェンダー・ステレオタイプの内容を実証的に検討したのは、柏木（1967，1972，1974）である。柏木（1972）は、性格特性を表した形容詞項目について、男性についての望ましさと女性についての望ましさを評定させ、それらの評定値の個人内の差異得点の因子分析を行った。その結果、男性役割因子として、「知性」と「行動力」の因子を、女性役割因子として、「従順と美」が複合した因子を抽出した。では、このようなジェンダー・ステレオタイプの内容は、現在、どの程度維持されているのであろうか。あるいはどのような変化が生じているのであろうか。その研究例として、湯川（2002）は、1970年代に女性的性格、男性的性格を表すとされた形容詞を用い、それらが1990年代に入り、どのように変化したのか、大学生を対象に検討した。その結果、男女とも1970年代より1990年代の方が、男性特性語あるいは女性特性語に分類された語数は減少していたものの、年代や性別を越えて、多くの男性特性語が「男性に当てはまる」と判断され、多くの女性特性語が「女性に当てはまる」と判断されていた。特に、90年代でも依然強く維持されている男性特性語として、「つよい」、「経済力のある」、「指導力のある」があり、女性特性語は、「かわいい」、「美しい」、「気持ちのこまやかな」があった。ただし、1970年代では「男女両方にあてはまる」特性語は「頭のよい」のみであったものが、1990年代には、「積極的な」「明るい」が付け加えられた。また、後藤・廣岡（2003）の研究では、女性役割語のうち「献身的な」や「言葉遣いの丁寧な」は、男女とも社会において重要であると評価する新しい傾向が見出されている。

そこで本研究では、先行研究で明らかにされてきたジェンダー・ステレオタイプの内容や、男女のいずれかにより多く認められるという判断基準で項目を選定した、共同性-作動性尺度（CAS：Communion-Agency Scale；土肥・廣川，2004）の項目について、その下位尺度である共同性（女性性）が、男性より女

性に多くみられるものと認知されているか、同様に作動性（男性性）は、女性より男性に多くみられるものと認知されているかを、再度検討する。これが本研究の第一の目的である。

本研究の第二の目的は、共同性－作動性尺度の因子的妥当性を検討することである。共同性－作動性尺度は、個人の女性性と男性性を測定する尺度であるが、女性性も男性性も、複数の因子から構成されていることが多くの研究で指摘されており、全ての因子を網羅した尺度を作成することは困難である。そのためこの共同性－作動性尺度は、女性性の中核となる共同性因子、男性性の中核となる作動性因子だけに限定して項目を選定している。

また、共同性－作動性尺度は、共同性と作動性のそれぞれを、肯否両側面から測定するものである。肯定的とは、社会的に望ましい特性であることを指しており、反対に、否定的とは、社会的に望ましくない特性であることを指す。Helgeson（1994）は、たとえ肯定的な作動性であっても、それが過剰で度を過ぎてしまうと、望ましくない特性となり、それをunmitigated agencyと名づけた。同様に、過剰で度を過ぎた共同性はunmitigated communionである。こうした過剰性を否定的側面ととらえ、尺度項目としたのが、筆者らの否定的共同性と否定的作動性である。否定的共同性は肯定的作動性により緩和（mitigate）され、否定的作動性は肯定的共同性により緩和されるとHelgeson（1994）は仮定している。ここでいう過剰性は、単なる程度の問題ではなく、質的に異なるものとされており、本尺度においても肯否の違いにより異なる因子に高く負荷するものと考えられる。

以上のことを踏まえ本研究では、まず、4つの下位尺度（肯定的共同性、肯定的作動性、否定的共同性、否定的作動性）の各6項目、計24項目を主成分分析にかけ、それぞれの下位尺度項目が高く負荷する4因子構造を示すかどうかを検討する。

さらに、4つの下位尺度得点を観測変数とする確認的因子分析を行うことにより、共同性－作動性尺度の構成概念妥当性を検討する。土肥（1999）の男性性・女性性の規定モデルによれば、女性の場合、ジェンダー・スキーマ（Bem,1981）が高いと、肯否両側面の共同性（女性性）は高まるが、作動性（男

性性)は抑制されると予想できる。自分を女性であると同一化し、また様々な情報をジェンダーに基づいて男性的であるとか女性的であるなどと区別をする傾向が強い個人にとって、自分が女性であることと女性性をもつこととは、認知的に斉合するが、男性性をもつこととは不斉合だからである。反対に、男性の場合は、ジェンダー・スキーマが高いと、肯否両側面の作動性(男性性)は高まるが共同性(女性性)は抑制されると予想できる。また、このモデルでは、男女いずれの場合も、肯定的共同性と肯定的作動性の両方を高める因子として、ジェンダー・アイデンティティを仮定している。ジェンダー・アイデンティティとは、女性として、あるいは男性としての自分らしさ、生き方である。これを確立させる段階で、共同性と作動性は、そのいずれかだけがあればよいというものではなく、双方とも高く兼ね備えていることが必要であると理解するようになると考えられるからである。さらに、男女いずれの場合も、否定的共同性、否定的作動性に共通する因子として、過剰性の因子が仮定できる。これは、ジェンダー・アイデンティティの因子と負の相関がみられるであろう。そこで、共同性と作動性の肯否両側面が、これらの因子によって規定されることを男女別に確認する。

## <方法>

関西の私立大学(S女子大学、K女子大学、K大学、F大学)の心理学関係の学部、学科に所属する男女大学生に対して、共同性-作動性尺度(尺度項目は、Table1を参照)の質問紙調査を行った。その尺度項目には、女性的役割(共同性)の肯定的・否定的側面が各6項目ずつ、計12項目あり、男性的役割(作動性)の肯定的・否定的側面も各6項目ずつ、計12項目ある。また、後述の通り、記述的ジェンダー・ステレオタイプの評定と、自己概念の評定を行ったが、それぞれの評定は、二度に分けて行ったため、両方の評定を同時に行った場合と、別々に行った場合があった。そのため、調査対象者には、ジェンダー・ステレオタイプと自己概念の両方の評定をした学生と、いずれか一方だけを評定した学生が含まれる。各評定をした学生の人数は、記述的ジェンダー・ステレオタイプの評定者が、女子419名、男子110名。自己概念の評定者が、女子644名、男

子289名であった。調査は心理学関係の授業時間中に集団で実施した。

記述的ジェンダー・ステレオタイプは、各尺度項目について、一般に男性の中には、どのくらい、そのような人がいると思うか、また一般に女性の中には、どのくらい、そのような人がいると思うか、調査対象者自身の判断で、男性、女性のそれぞれの推定割合を、0%から100%までで答えさせた。男性についての推定割合より女性についての推定割合の方が統計的に有意に高い項目は、女性的特性としてステレオタイプ化されていると判断する。女性についての推定割合より男性についての推定割合の方が高い項目は、男性的特性としてステレオタイプ化されていると判断する。

自己概念は、各項目が、自分にどのくらいあてはまるかを、4件法のリカー ト形式で回答させた。反応形式は、「4. かなり当てはまる」「3. やや当てはまる」「2. あまり当てはまらない」「1. 全く当てはまらない」で、得点が高いほど、それらの特性が強いことを示す。

## <結果>

共同性－作動性尺度の24項目が、男女それぞれに対する記述的ステレオタイプとして認識されているかどうかを判断するため、男女対象者ごとに、各項目で示された行動や性格を持つと推定された男性の割合、および女性の割合の基本統計量を算出した。そして、対応のあるt検定により、個人内で男女の推定割合に差が認められるかどうかを検討した。それらの結果は、Table 1 に示す通りである。

分析の結果、女性対象者に関しては、24項目の全てで、推定された男性割合(%)と女性割合(%)の間に、有意差が認められた。すなわち、全ての共同性(女性性)の項目内容は、男性よりも女性の方が多く見られると判断され、全ての作動性(男性性)の項目内容は、女性より男性の方が多く見られると判断された。それに対して男性対象者では、有意差が見られた項目は全尺度項目の半数以下で、それ以外の項目には、男女に対する推定割合に有意な差が認められなかった。特に、肯否両側面とも、作動性(男性性)に関する項目の多くで、男女間に割合の違いはないと判断されていた。これを女性対象者の判断と比べ

ると、男性対象者による、作動性（男性性）の推定男性割合は、女性対象者による、作動性の推定男性割合よりもかなり低かった。また、男性対象者による、作動性の推定女性割合は、女性対象者による、作動性の推定女性割合と違いがあまりなかった。

次に共同性に関する推定割合をみていくと、作動性ほどではないが、共同性においても、男性対象者に比べて女性対象者は、男女に対する推定割合に、顕著な有意差がみられた。すなわち、女性対象者による共同性の推定女性割合は、肯否両側面とも、推定男性割合よりもかなり高い傾向があることが見出された。

次に、共同性－作動性尺度24項目の自己評価得点を用いて、男女別に主成分分析した。男女とも、下位尺度数にしたがって4主成分を抽出することにし、プロマックス回転させた。その結果、成分負荷量は、女性対象者の結果はTable2、男性対象者の結果はTable3の通りとなった。

女性対象者の場合、各下位尺度項目群が一致して同じ主成分に高く負荷する傾向があまりみられなかった。具体的には、第1主成分は、「自分とは異なる意見を受け入れることはできない」などの否定的作動性の尺度項目がプラスの負荷量、「素直に謝ることができる」などの肯定的共同性の尺度項目がマイナスの負荷量を示した。第2、第3主成分は、それぞれ、「自分の意見は主張する」などの肯定的作動性と「人の言葉に傷つきやすい」などの否定的共同性の尺度項目が高く負荷してまとまった。第4主成分は、「意志が強く、信念をもっている」などの肯定的作動性の尺度項目がプラスの負荷量を示したが、共同性は、「相手の立場にたって考えられる」や「すぐに人に頼ることを考えてしまう」の、肯定的・否定的の双方の尺度項目が高く負荷した。

男性対象者の場合は、第1主成分から順に、「人をほめるのがうまい」などの肯定的共同性、「他人を自分のいいなりにさせる」などの否定的作動性、「意志が強く、信念をもっている」などの肯定的作動性、「周りの人のことを考えずぎて、行動できない」などの否定的共同性の下位尺度項目が高く負荷しており、尺度の因子的妥当性が確かめられた。

Table 1 共同性－作動性尺度の記述的ステレオタイプに関する検討結果(男女別)

下位尺度	女性対象者			男性対象者			
	推定男性割合(%)	推定女性割合(%)	t値 (df=418)	推定男性割合(%)	推定女性割合(%)	t値 (df=109)	
(女性性) 肯定的共同性	ありがとうございます言葉を口に出せる	58	73	*** -19.05	60	69	*** -4.20
	相手の立場にたって考えられる	54	64	*** -13.82	51	52	-.76
	素直に謝ることができる	53	63	*** -12.17	50	55	* -2.51
	人をほめるのがうまい	48	68	*** -17.96	45	60	*** -6.89
	人と協力できる	62	69	*** -8.86	60	64	* -2.20
(男性性) 肯定的作動性	思いやりをもって人と接している	60	67	*** -10.43	55	58	-1.78
	積極的に活動する	69	60	*** 10.39	57	59	-.62
	自分の意見は主張する	66	56	*** 10.84	56	56	.18
	自分に自信がある	62	57	*** 7.08	54	55	-.49
	困難なことにぶつかってもくじけない	64	54	*** 11.03	53	49	1.80
(女性性) 否定的共同性	一度決心すれば、すぐに行動に移す	65	54	*** 11.69	53	51	1.23
	意志が強く、信念を持っている	67	57	*** 10.96	54	51	1.60
	他人のことを気にしすぎる	44	68	*** -22.82	51	66	*** -5.76
	人前で自分の意見をいうのは苦手だ	45	57	*** -13.42	52	52	-.14
	すぐに人に頼ることを考えてしまう	39	64	*** -23.02	48	58	*** -4.07
(男性性) 否定的作動性	人の言葉に傷つきやすい	50	68	*** -16.10	56	65	** -3.19
	周りの人のことを考えすぎて行動できない	36	52	*** -17.14	41	48	** -2.90
	人の発言を深読みしすぎる	40	62	*** -20.15	50	56	** -2.79
	無能な人は我慢できない	59	54	*** 4.77	55	54	.49
	他人を自分のいいなりにさせる	62	48	*** 13.74	52	53	-.40
(女性性) 否定的共同性	相手の言い分に耳をかさない	56	48	*** 9.19	51	53	-.88
	人に攻撃的な態度をとる	59	44	*** 15.28	60	48	*** 4.37
	自分とは異なる意見を受け入れることはできない	54	46	*** 9.98	53	51	.83
(男性性) 否定的作動性	人の失敗は許せない	52	47	*** 5.36	50	49	.76

\* P&lt;.05 \*\* P&lt;.01 \*\*\* P&lt;.001



Table 2 共同性-作動性尺度項目の成分負荷量 (女性対象者)

	成分負荷量			
	肯 否 定 共 作 同 動 と	肯 定 作 動	否 定 共 同	肯 定 否 作 共 同 動 と
作-) 自分とは異なる意見を受け入れることはできない	0.63	0.07	0.14	0.11
共+) 素直に謝ることができる	-0.62	0.23	0.07	-0.07
作-) 人の失敗は許せない	0.62	0.12	0.28	0.13
共+) ありがたい言葉を口に出せる	-0.57	0.37	0.12	-0.17
共+) 人と協力できる	-0.56	0.23	0.08	0.08
作-) 相手の言い分に耳をかさない	0.56	0.17	0.06	-0.18
作-) 人に攻撃的な態度をとる	0.50	0.41	0.08	-0.28
作-) 無能な人は我慢できない	0.50	0.23	0.23	0.17
作-) 他人を自分のいいなりにさせる	0.49	0.43	0.04	-0.03
共+) 思いやりをもって人と接している	-0.41	0.10	0.19	0.40
作+) 自分の意見は主張する	0.08	0.76	-0.18	-0.02
作+) 積極的に活動する	-0.10	0.68	-0.08	0.13
共-) 人前で自分の意見を言うのは苦手だ	0.03	-0.66	0.23	0.01
作+) 自分に自信がある	0.10	0.50	-0.13	0.22
共+) 人をほめるのがうまい	-0.37	0.38	0.21	0.08
共-) 人の言葉に傷つきやすい	-0.03	0.00	0.74	-0.20
共-) 他人のことを気にしすぎる	0.03	-0.25	0.74	0.01
共-) 人の発言を深読みしすぎる	0.21	-0.08	0.71	-0.02
共-) 周りの人のことを考えすぎて、行動できない	0.05	-0.42	0.68	0.03
共-) すぐに人に頼ることを考えてしまう	-0.18	0.13	0.26	-0.74
作+) 意志が強く、信念をもっている	0.07	0.27	0.04	0.62
作+) 困難なことにもぶつかってもくじけない	-0.09	0.20	-0.13	0.59
共+) 相手の立場にたって考えられる	-0.28	0.00	0.20	0.43
作+) 一度決心すれば、すぐに行動に移す	0.12	0.40	0.02	0.42
プロマックス回転後の因子寄与	3.54	3.51	2.48	2.91

Table 3 共同性-作動性尺度項目の成分負荷量 (男性対象者)

	成分負荷量			
	肯 否 共 同	否 定 作 動	肯 定 作 動	否 定 共 同
共+) 人をほめるのがうまい	0.69	0.13	-0.10	0.01
共+) ありがとうの言葉を口に出せる	0.69	-0.06	-0.02	-0.10
共+) 思いやりをもって人と接している	0.66	-0.27	0.05	0.14
共+) 人と協力できる	0.65	-0.15	-0.02	-0.02
共+) 相手の立場にたって考えられる	0.57	-0.09	0.06	0.39
共+) 素直に謝ることができる	0.55	-0.19	0.13	0.11
作-) 他人を自分のいいなりにさせる	0.02	0.72	-0.03	0.05
作-) 人に攻撃的な態度をとる	0.00	0.67	-0.24	-0.16
作-) 人の失敗は許せない	-0.19	0.65	0.13	0.20
作-) 無能な人は我慢できない	-0.02	0.59	0.15	0.10
作-) 相手の言い分に耳をかさない	-0.19	0.59	-0.06	0.03
作-) 自分とは異なる意見を受け入れることはできない	-0.23	0.59	0.11	0.25
作+) 自分の意見は主張する	0.26	0.38	0.24	-0.35
作+) 意志が強く、信念をもっている	-0.01	0.13	0.77	0.04
作+) 一度決心すれば、すぐに行動に移す	-0.02	0.06	0.76	0.11
共-) すぐに人に頼ることを考えてしまう	0.36	0.33	-0.73	0.05
作+) 困難なことにもぶつかってもくじけない	0.18	-0.12	0.69	0.05
作+) 積極的に活動する	0.37	0.09	0.49	-0.10
作+) 自分に自信がある	0.13	0.19	0.44	-0.25
共-) 周りの人のことを考えすぎて、行動できない	-0.09	0.00	0.18	0.85
共-) 他人のことを気にしすぎる	0.19	0.11	-0.10	0.78
共-) 人の発言を深読みしすぎる	0.03	0.26	0.09	0.70
共-) 人の言葉に傷つきやすい	0.27	0.15	-0.15	0.62
共-) 人前で自分の意見を言うのは苦手だ	-0.15	-0.18	-0.22	0.52
プロマックス回転後の因子寄与	3.54	3.51	3.80	3.38

次に、Fig.1,2に示した仮説モデルに関して、確認的因子分析を男女別に行ったところ、女性対象者については、 $\chi^2(2) = 27.5$  ( $p < .001$ ), GFI=.980, AGFI=.898となり、モデルとデータ間の残差分析からは、ある程度の適合性が認められた。男性対象者については、 $\chi^2(2) = 10.34$  ( $p < .01$ ), GFI=.982, AGFI=.912となり、こちらも残差分析からは、ほぼ十分な適合性が認められた。

男女とも、因子から観測変数への影響指数、因子間相関係数とも、モデルから予想された通りの結果が得られた。すなわち、女性対象者の場合は、ジェンダー・スキーマの因子から肯否両側面の共同性へは、プラスの影響指標になり、対照的に肯否両側面の作動性へは、マイナスの影響指標となった。男性対象者の場合は、ジェンダー・スキーマの因子からの肯否両側面の共同性へは、マイナスの影響指標になり、肯否両側面の作動性へは、プラスの影響指標となった。

さらに、ジェンダー・アイデンティティの因子から、肯定的作動性と肯定的共同性への指標は男女ともプラスになった。過剰性の因子から、否定的作動性と否定的共同性への指標は男女ともプラスになった。そして、ジェンダー・アイデンティティと過剰性の因子間には、負の相関が認められた。

なお、ジェンダー・アイデンティティ因子と過剰性因子間の相関を認めないモデルは、女性対象者については、 $\chi^2(3) = 83.0$  ( $p < .001$ ), GFI=.945, AGFI=.816, 男性対象者については、 $\chi^2(3) = 14.8$  ( $p < .01$ ), GFI=.974, AGFI=.915となり、因子間の相関を認めないモデルよりも認めたモデルの方が、適合度は高かった。さらに、ジェンダー・スキーマの1因子だけを想定したモデルも検討したところ、女性対象者については、 $\chi^2(4) = 307.95$  ( $p < .001$ ), GFI=.831, AGFI=.577, 男性対象者については、 $\chi^2(5) = 158.09$  ( $p < .001$ ), GFI=.830, AGFI=.659となり、ここでも、ジェンダー・スキーマの1因子だけを想定したモデルよりも、それに加えてジェンダー・アイデンティティと過剰性の因子も含めたモデルの方が、適合度は高いことが明らかになった。

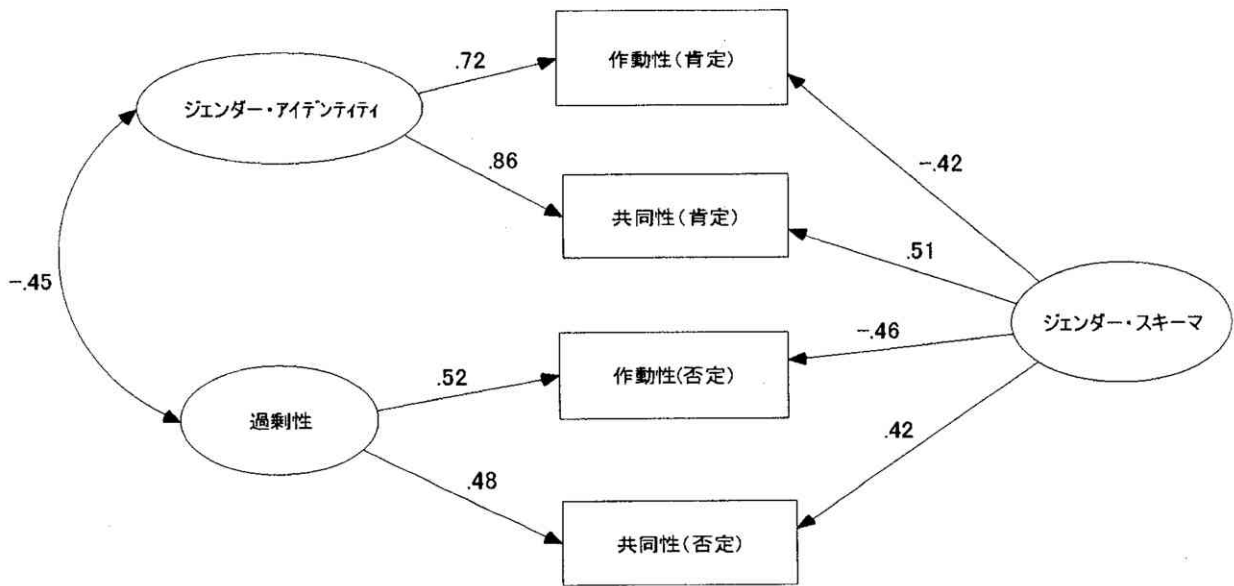


Fig.1 女性対象者の確認的因子分析の結果 (数値は標準化推定値)

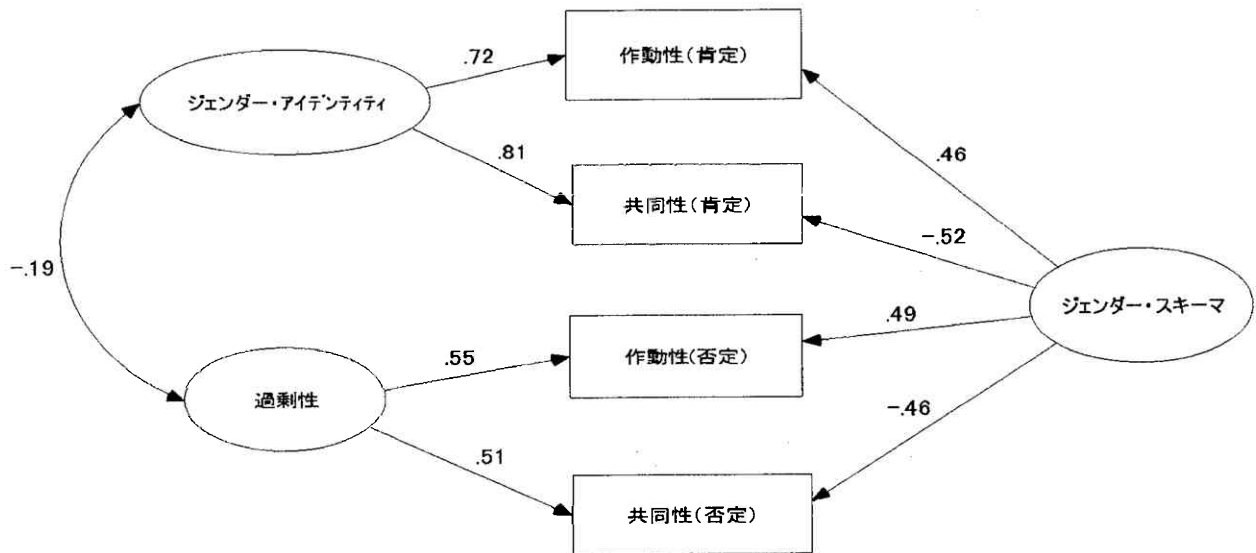


Fig. 2 男性対象者の確認的因子分析の結果 (数値は標準化推定値)

さらに、男女対象者別に、CASの下位尺度の $\alpha$ 係数を求めたところ、Table 4の通りとなり、女子大学生の否定的共同性尺度の信頼性係数が、 $\alpha=.693$ で、0.7をわずかに下回った以外は、全ての下位尺度で $\alpha$ 係数が0.7を上回っており、ほぼ十分な信頼性が認められた。また、男女別の下位尺度得点と、男女対象者間の平均値の差の検定結果も、Table4に示した通りであった。否定的共同性の尺度得点のみ、女性対象者の方が有意に高かったが、それ以外の尺度得点では男女間に有意差は認められなかった。

Table4 男女別 CAS下位尺度の信頼性係数，尺度得点，男女平均値の差の検定

下位尺度	女性対象者		男性対象者		t 値
	$\alpha$ 係数	平均値 (S.D.)	$\alpha$ 係数	平均値 (S.D.)	
肯定的共同性 (女性性)	.707	18.8 (2.5)	.753	18.5 (2.9)	t(482.3)=-1.47(n.s.)
肯定的作動性 (男性性)	.767	15.3 (15.3)	.817	15.5 (3.6)	t(931)=-.788(n.s.)
否定的共同性 (女性性)	.693	17.2 (3.2)	.751	16.4 (3.6)	t(931)=-3.30,p<.01
否定的作動性 (男性性)	.725	11.8 (2.8)	.737	12.1 (3.1)	t(931)=1.06(n.s.)

### <考察>

本研究の第一の目的は、共同性-作動性尺度（CAS：Communion-Agency Scale；土肥・廣川，2004）の項目について、共同性（女性性）が、男性より女性に多くみられるものと認知されているか、同様に作動性（男性性）は、女性より男性に多くみられるものと認知されているかを検討することを通して、尺度項目が記述的ジェンダー・ステレオタイプを示したものと認識されているかを確認することであった。分析の結果、女性対象者は、ステレオタイプと一致して、尺度項目の全てが男性あるいは女性に偏って多く見られるものと認識されており、尺度の構成概念妥当性が確かめられた。少なくとも現代の女子大学

生には、ジェンダー・ステレオタイプは従来の内容と一致した方向で認識されているということであろう。それとは対照的に、男性対象者の回答では、作動性（男性性）が男性に見られる割合を、女性よりもかなり低く評定する傾向が顕著であった。男性は、女性に対するステレオタイプはさておき、男性自身に対しては、ステレオタイプ的な見方をする傾向が弱まりつつあるようである。これは、女性が未だに女性自身の共同性（女性性）を強く自覚していることと対照的である。自己概念の尺度得点（Table4参照）でも、従来、男性により強く期待されていた作動性の点に、有意な男女差はみられていない。筆者の先行研究では、ジェンダー・ステレオタイプを強く認識する傾向を示す、強いジェンダー・スキーマをもつのは、常に女性よりも男性であった。たとえば、土肥（1998）の研究では、伊藤（1978）のMHFスケールの男性性項目、女性性項目について、本研究と同様に、男女についての推定割合を判断させた。その結果、男性の方が女性よりも、男女についての推定割合の差が大きくなっていたのである。しかし本研究の結果からは、近年は、女性よりも男性の方から、ジェンダーへの認識や自覚が弱まりつつある可能性が示唆された。女性対象者は、男性自身が手放しつつある作動性（男性性）を、男性は依然もっているものと考えており、認知的側面に限定すれば、意外にも、女性の方が伝統的ジェンダー観をもっていると考えられる。

ここで注意したいのは、女子大学生の対象者数がかなり多かったことにより、女性対象者の場合だけ、対応のあるt検定の結果で有意差が顕著にみられた可能性があることである。しかし、男子大学生の対象者数とほぼ等しい、2つの大学の女子大学生のデータだけを取り出して、それぞれt検定しても、K女子大学（N=86）では全ての項目で有意差が認められ、S女子大学（N=160）では、否定的作動性の「無能な人は我慢できない」の項目が、 $t(159) = 1.296, n.s.$ となった以外は、全ての項目で有意差が認められたのである。

本研究の第二の目的は、共同性－作動性尺度の因子的妥当性を検討することであった。主成分分析によって得られた尺度項目の主成分への負荷量からは、男性対象者は想定された通りの因子構造を認識していた。これにより、男性対象者に関しては、共同性－作動性尺度項目の因子的妥当性は認められたといえ

よう。ところが、女性対象者にとっては、たとえば第1主成分でみられたように、否定的作動性の尺度項目と肯定的共同性の尺度項目が混在していた。これは、肯定的共同性と否定的作動性は、個人の中では同様の内容のものとして把握されている可能性を示唆している。しかしその一方で、本研究の第一の目的として扱った記述的ステレオタイプでは、女性対象者は男性対象者以上に、共同性は女性に多く見られるもの、作動性は男性に多く見られるものと判断していた。つまり、これらの概念は認知的には分化されていることが推測できるのである。では女性対象者でみられた、自己概念とステレオタイプ（ジェンダー観）の間のギャップをどう解釈すればよいのであろうか。おそらく女性は男性よりもジェンダー・アイデンティティが確立しており、ジェンダーの区別を強く認識しながらも、すなわちジェンダー・スキーマは強くもつものの、それを自分自身（自己概念）には当てはめようとしていないと考えられる。そして、同じ成分内で異なる下位尺度項目が混在するのは、それらが未分化なのではなく、統合させているとみなすことも可能である。それを裏づけるかのようには、女性は、自己概念として、男性性と同程度の作動性をもっており、異性に対する期待と自分自身のこととを、状況に応じて使い分けていることが示唆されている。

確認的因子分析の結果については、男性性・女性性の規定モデルで仮定された通りに、ジェンダー・スキーマ因子からの影響指数が見出された。また、ジェンダー・アイデンティティ因子からは肯定的共同性と肯定的作動性へプラスの影響指数、過剰性因子からは否定的共同性と否定的作動性へプラスの影響指数がみられ、それらの因子間には負の相関がみられたことから、男女対象者ともに、下位尺度の構成概念、および概念間の関係が妥当なものであることが支持されたといえる。また、本研究の確認的因子分析の結果は、女子大学生を対象に、同じモデルで分析した土肥・廣川（2007）の結果とも一致したものとなった。ただし、データとモデル間の適合性については、必ずしも十分満足できるレベルには達していないため、尺度項目の分析を続け、改良を重ねたい。

今後の課題としては、本研究の確認的因子分析モデル内の因子の観測変数をモデルに加えた、構成概念妥当性の検討を続けることがある。また、肯定的共

同性と肯定的作動性の高低の組み合わせによって特定されるジェンダー・タイプを、質問紙で測定されたジェンダー・スキーマとジェンダー・アイデンティティによって判別できるかどうかの検討も必要である。その際、否定的共同性と否定的作動性も考慮することによって、典型的なジェンダー・タイプが特定できるため、そのタイプについての判別も可能となる。そして、これらの構成概念妥当性の検討を経た上で、心身の健康や社会的適応などの多様な指標と照らし合わせることで、共同性－作動性尺度の基準関連妥当性が確かめられるであろう。

(本学教授，福山大学専任講師，関西学院大学博士前期課程修了)

### <文献>

Bakan,D. 1966 *The duality of human existence* Chicago: Rand McNally.

Basow,S.A. 1992 *Gender: Stereotypes and roles.(3ed ed.)* Pacific Grove,CA: Brooks/Cole.

Bem,S.L. 1981 Gender schema theory: A cognitive account of sex typing. *Psychological Review*,88, 354-364.

土肥伊都子 1998 男性性・女性性の規定モデルの実証的検討 四天王寺国際仏教大学紀要文学部, 30, 92-107.

土肥伊都子 1999 ジェンダーに関する自己概念の研究 -男性性・女性性の規定因とその機能-多賀出版

土肥伊都子 2004 「男女の思いこみ」をつくる心のしくみ 青野篤子・森永康子・土肥伊都子 (共著) ジェンダーの心理学 (改訂版) ミネルヴァ書房. pp.25-47.

土肥伊都子 2006 男らしさ・女らしさ 福富護 (編) 講座心理学14 ジェンダー心理学 朝倉書店. pp.105-120.

土肥伊都子・廣川空美 2004 共同性・作動性尺度 (CAS) の作成と構成概念妥当性の検討 -ジェンダー・パーソナリティの肯否両側面の測定 心理学研究, 75, 420-427.

土肥伊都子・廣川空美 2007 共同性－作動性尺度 (CAS: communion-agency



- scale) の因子的妥当性の検討 日本心理学会第71回大会発表論文集, 1268-1269.
- 後藤淳子・廣岡秀一 2003 大学生における性役割特性語認知と性役割態度の変化 三重大学教育学部研究紀要, 54, 145-158.
- Helgeson, V.S. 1994 Relation of agency and communion to well-being: Evidence and potential explanations. *Psychological Bulletin*, 116, 412-428.
- 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, 26, 1-11.
- 柏木恵子 1967 青年期における性役割の認知 教育心理学研究, 15, 193-202.
- 柏木恵子 1972 青年期における性役割の認知Ⅱ 教育心理学研究, 20, 48-59.
- 柏木恵子 1974 青年期における性役割の認知Ⅲ 教育心理学研究, 22, 205-215.
- Lippa, R.A. 1990 *Introduction to social psychology*. Belmont: Wadsworth.
- Money, J., Hampson, J.G., & Hampson, J.L. 1957 Imprinting and establishment of gender role. *Archives of Neurology and Psychiatry*, 77, 333-366.
- Money, J., & Tucker, P. 1975 *Sexual signatures: On being a man or a woman*. Little, Brown & Co. 朝山新一・朝山春江・朝山耿吉 (訳) 1979 性の署名 人文書院.
- 湯川隆子 2002 大学生におけるジェンダー (性役割) 特性語の認知 - ここ20年の変化- 三重大学教育学部研究紀要, 53, 73-86.